

未来見つめ 海外協業

国の「ものづくり日本大賞」の優秀賞に今月選ばれた小松電機産業(松江市乃木福富町)は、工場内を仕切る塩化ビニール製のシートシャッターで国内市場の3割強を占める。韓国への積極的な展開も特徴の一つだ。難しい日韓関係の中、信頼をどう築いてきたのか。小松昭夫社長(67)に聞いた。



—受賞はどこが評価されたのですか

今までの延長線上ではなく、事業を転換して新しい商材を作り、マーケットを創造してきた。シートシャッターは初めは工場への出入り口用だったが、工場内の間仕切り用に進化させた。生産ラインの変更に対応し、機能的な空間をつくるという新しいコンセプトが受賞につながったと思う。

— 昨年は、韓国から部品の輸入を始めましたね。韓国との付き合いはいつから

35歳で初めて旅行しました。それまで関心はなかった。日本人とわかるとタクシーから降ろ

小松電機産業 小松昭夫社長 (67)

されそうになるなど、ひどい思いをした。その原因と背景を知りたくて、勉強を始めた。

— 企業としてのつながりは1990年からですね

国内の展示会でシートシャッターを見た韓国のベンチャー企業から、業務提携を申し込まれ、無償で技術提供した。韓国の大手からも誘いがあったが、純然たる商売でおもしろくないし、もうける気はなかった。勉強するのにちょうどいいと思った。相手には、反日の記念館によく連れて行ってもらった。

— そういう経験から見えてきたものは

日本人が韓国人を拷問する様子を表現した人形などを見て、どんどん質問して深く広く聞いた。歴史的に韓国人は被害者意識が強くあり、日本人は戦争を勉強せず韓国は苦手だと遠ざける。技術面では、日本は教えてやるというスタンスで、韓国は仕方ないけど吸収したい。お互

過去にも向き合い「和議」へ

いに傲慢で卑屈な部分があると思った。

— 日韓の垣根は乗り越えられなかったか

乗り越えるんじゃない。双方のメンツが立つよう持っていくことがポイントだ。日韓の周りには、米国、ロシア、中国と資源や産業で脅威となる国がある。お互いの未来のために力を合わせるじゃないかと。

— 具体的には

いきなり提案してもだめ。相手が感心するぐらい、何度も記念館に足を運んで献花し謝罪し、実績を積み、この日本人は違うと思ってもらおう。都合のいいものはもらって、怨念や恨みには耳を貸さないのでは信頼されない。順序を踏まずに前向きな話ができない。そういう段取りを戦略的にやるのが経営だ。

— 理念に掲げる「和議」とは
出雲大社教の管長、千家達彦さんの造語です。まず共感というベースをつくり、そこに価値観が同じ人や色んな思惑をもった人が集まり、和になる。自分は何を譲って、相手には何を譲ってもらおうか。共感、対立、統合、発展を繰り返すことでいいものが生まれる。少数派を否定しないルールを作り、意見を反映させて、よりいい意見に導くことが大切だ。

— 今後の展望は

「ガレージファクトリー構想」を進めている。今までは完成品を輸出していたが、小さな工場を世界各地に設け、送った半製品を現地で完成させる。ニーズがわかり、アフターサービスもしやすい。韓国を皮切りに工場を増やしたい。それにここは原発から約10キロ。何かあれば供給が止まってしまう。震災以降、リスク回避の意味でも早く構想を進めようと考えている。

(聞き手・小林一茂)



本社に入ると看板商品「門番」が迎える。「社会変動に対応できる製品をつくらなくては」と話す小松昭夫社長。松江市乃木福富町

小松電機産業 1973年、松江市の自宅納屋で創業。85年にシートシャッター「門番」、92年に上下水道を制御・監視するシステム「やくも水神」を発表。2010年に韓国ソウル支社を設立し、法人化。年商32億円。従業員90人。